

読んで  
みましたノーベル文学賞受賞 スベトラーナ・アレクシエービッチ氏の  
『チエルノブイリの祈り』その他をめぐって

杉山秀子（会員）

アレクシエービッチ氏については、作品内容の重大さに比して日本ではそれほど大きくとりあげられてはいなかった。日本がフクシマの大惨事を経験して改めて原発事故を受けた人間の苦悩に焦点を当てられてから見直されたという経過がある。これまで5作品が日本で翻訳出版されている。

『ボタン穴から見た戦争』、『死に魅入られた人々』、『戦争は女の顔をしていない』（三浦みどり訳）の3作品は群像社から2000〜08年にかけて出版されている。

アレクシエービッチ氏はデビュー作『戦争は女の顔をしていない』、『ボタン穴から見た戦争』で第2次世界大戦をとりあ

げ、対ファシズム戦を戦った英雄としてのロシア人の言説が、如何に虚飾にまみれた偽りのものであったかを自らの作品をもって赤裸々に語った。文学の手法としてはジャーナリストとしての氏特有の立場を利用して数万人の人にインタビューした記事を集成したものである。

戦争に参加した女たちの多くは志願兵として採用され、それまで受けた社会主義思想の下に祖国に尽くすという定式通りに働くが、その戦争に参加していく過程で様々な生身の人間としての苦悩が描かれている。

それらは決して大祖国戦争の勝利の結果、顕彰されている兵士たちの生きざまが美化されたものではなく、むしろ矛盾と過

酷さの中で戦った事実が赤裸々に語られている。多くの女性兵士は称賛を得たが、現実には、一生ひっそり独身で過ごし、世間からも偏見の眼でみられたことも語られている。

『チエルノブイリの祈り』（松本妙子訳、岩波書店）では民衆の声を採録して、並列的に記載するルポルタージュ形式をとっている。この書はチエルノブイリ原発爆発事故で、放射性物質による大量の放射線被ばくを受けたベラルーシの民衆の生の声である。

目に見えない「放射能」への恐怖と無知に由来する「デマ」や「差別」行動に翻弄される醜い姿が描かれ、それが死と隣り合わせであっても、愛する土

地、家畜、家族から離れられない民衆の深い悲しみの姿が話し言葉でリアルに描かれている。

消防士の妻や、事故処理にあたった人たちへインタビューした、真実の体験である。原発事故の恐ろしさと放射能を浴びた人間がどのような悲惨なめにあうかがよくわかる。

国際原子力機関（IAEA）はひたすら事故を過小評価しようとする。そしてそれに輪をかけて、その実態を隠そうとする旧ソ連の政治体制はまるで同じことをする日本政府と東電の関係者の姿そのものを描いていて身につまされる。

記録映画を撮ろうとすると、しかるべき機関からフィルムを没収され、撮影されたのは英雄的ヒロイズムばかりであり、党幹部は事故を過小評価しようとし、情報はひたすら隠す。学者は「食べても大丈夫。健康に害はない」と口をそろえて言い張る。（しかし、党幹部や学者は汚染地区の食物を口にしないし、自分たちの子どもはきれいな

な空気のところに入り込んでいく。日本ではちょうど福島第一原発の事故直後、東電の関係者が夜中にバスを何台も連ねてその家族を京都に送り込んだのと同じことがすでに30年前のチェルノブイリでやられていた。)

さらに経済的理由のため、避難区域はドンドン縮小する。高汚染地区なのに民衆に「早く戻って来い」という日本の行政とまったくおなじではないか。

そして経済性のため、食物の放射能基準値を引き上げるということは、まさに今日日本で同じことが繰り返されているのであり、日本人はチェルノブイリという歴史的経験から全く何も学んでいないということがわかる。

脳梗塞、心臓病で亡くなる数多くの人々、甲状腺を患い、癌になる子どもたち、白血病、脳浮腫になっていく子どもたちが描かれ、罹病の因果関係ははっきりしないと思捨てられる子どもたちのあり様は日本の現実そ

のものと言っても過言ではない。

凄く印象に残っているシーンは、原発爆発後最初に現地に入った消防士が、放射線障害で死の床に臥している時、それを見舞った妻に「君はオレンジが好きだったね。食べて」と枕元のオレンジをすすめる。

すでに夫は高濃度汚染の結果、体から発する放射線によって「オレンジ」は「オレンジ色」では無く「ピンク色」に変色している。妻がそれを涙ながらに食べようとしたとたん、看護師から「あなたは自殺志願者なの？ 早くここから離れなさい。ここにいるのはあなたの夫ではなく、放射線の物体なのよ！」と怒鳴られてしまうのは凄まじい被ばくの実態が描かれ、身につまされる。

1997年上記の衝撃的作品を出版後、アレクシエービッチ氏は2013年まで西欧にくらす。2013年スウェーデンで新著『セカンドハンドの時間』を出版。この作品で2013年

カナダの女流文学賞エリス・モロー賞を受賞している。その後、2013年に祖国に帰国している。

彼女に少なからぬ影響を与えた作家のD・ブイコフ氏はガゼータ・ルーのインタビューで「カタストロフィー、戦争、個人的悲劇を描くときは美辞麗句はあつてはならないというのが彼女が私淑する作家、アダモヴィッチ氏の考えであり、それを彼女は見事に踏襲している」。

スウェーデン・アカデミー総裁は受賞の意義を次のように語っている。「ただ筋を述べるのではなく、ノーベル賞を受賞するには新たな文学資源が必要である。アレクシエービッチ氏はこうしたイノヴェーションを体現させている」と高く評価している。

最後に蛇足になるが、ロシア文学の専門家の立場から言えることは、アカデミー総裁がここで評価しているイノヴェーションとはカタストロフィーの実体験をインタビューの形で聴きだ

し、それを物語っていることを指すとするならば、それはロシア文学の伝統というものの無知からきているだろう。ロシア文学には昔からオーチュルク(記録文学、ルポルタージュ)という形式があり、第2次大戦時には従軍記者兼作家がこの聴き語りの形式を多用して優れた戦争文学の一ジャンルを創ってきた経緯がある。

なぜこうまで彼女を評価するのか、他に彼女以上の技量と文学的素養を持った作家は数多く存在することも否定できない。結論的に言えることは、5作品通じて一貫して言えることは、突き詰めればすべてが体制批判に収斂されることだ。ここにこそアカデミー総裁の隠れた意図が見え隠れしているのではないかと考えられ、いささか疑心暗鬼に包まれるのだ。